

企業名：鉄建建設

レポート名：鉄建建設のコーポレートレポートに対する所感

### 1. この会社が目指す姿が理解できるか

結論から先に述べると、鉄建建設の目指す姿は理解できる。

このコーポレートレポートでは、5つの取組方針として、「2つの基盤」と「3つの柱」が掲げられていた。会社が今後さらなる発展を遂げるために必要な土台と、発展のための目標が明確に区別されて説明されていたため、鉄建建設の目指す姿は容易に理解できた。

しかし、目指す姿が理解できたはいいものの、それぞれの目標を達成するために具体的には何に取り組んでいるかがあまり明確には理解できなかった。

### 2. この会社の競争優位性が理解できるか

これに関しては、あまり理解できたとは言えない。

もちろん、「夢プロジェクトさくま」への参画や、それに伴い開発した「木質バイオマス化装置」の特許出願などの他社にはない技術は述べられていた。また、鉄建建設の得意分野は住宅などの建設であることにも触れられていた。しかし、これらは本当に競争優位性だと言えるのだろうか。他社にない技術を持っているのは誇れることであるが、それによってどのような面で、他社よりもビジネス上で有利になるかの説明が不十分だったように感じた。また、居住用の建築が得意分野であるといってもそれは鉄建建設内の話であり、同業他社と比較したとき優っているかについても言及されていなかったように思う。以上の理由から、鉄建建設の競争優位性を明確には理解できなかった。

### 3. 競争優位性が持続するか理解できるか

競争優位性が持続するかどうかはある程度理解できたように感じる。

上記で「鉄建建設の競争優位性は明確には理解できない」と述べたことと矛盾するように感じるかもしれないが、以下、私がこう考えた理由を述べる。

たしかに、現状の競争優位性への説明は不十分だったように思う。しかし、将来にむけて競争優位性が持続、もしくは拡大するかどうかの説明はなされていたように感じた。まず、「研究開発投資額」の推移である。コーポレートレポートによると、この研究開発投資額は

年々増加しており、2020年度には7億5400万円と、2016年度の投資額の約2倍になっている。このことから他社と差別化を図る新しい技術の開発への前向きな姿勢がうかがえる。また、鉄建建設は、2018年に「新事業推進部」を新設、2019年にはそれを「新事業推進室」へと組織変更を行い、農業、再生可能エネルギー、PFI・コンセッション事業等の新しい分野への取り組みを本格的に進めている。

以上のような理由から、鉄建建設は、新たな事業分野の拡大、技術の開発など、同業他社とは異なる価値を創造することに取り組んでいることが分かるため、競争優位性が持続するであろうことが十分に理解できると感じた。

#### 4. 自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

この問いへの私の答えは、同業種間なら達成できるが、異業種では達成できないというものである。

まず、同業種間での話をする。鉄建建設では入社7年目まで研修を行い、また、技術士や一級建築士などの難関資格の受験者のために、外部講師を招いての講習会、論文・製図の添削、模試の実施と解説など、資格合格者の増加を目指した取り組みを行っている。そのため、建設や土木関係の仕事に携わり続けるのであれば、自身の人的資本の価値を大きく向上させられる最適な環境の一つであると言える。

しかし現在、転職率は増加傾向にあり、異業種に転職するケースも稀ではない。このことを踏まえて考えると、すべての業種で役立つスキルを身に着けることが自身の人的資本の価値を大きく向上させることだと言える。そうなった場合、私が考えるそのスキルとは、「問題を自身の力で解決する能力」である。このスキルが育つ環境とは、与えられた仕事だけをこなすのではなく、自身で問題に対処する場面が現れるような職場環境ではないだろうか。このことを踏まえて鉄建建設のコーポレートレポートを見ると、『「川上の検討に参画」が実現することを目指す』とは書いてあるが、その他の具体的な案は書かれていない。そのためこの環境で、様々な業種で役に立つ「問題に対処する能力」が身につくか否かは理解できなかった。

以上の理由から、私は、同業種間では自身の人的資本の価値を向上させられるが、異業種間では達成できないという結論を得た。

#### 5. 報告書にはどのような改善余地があるか

改善の余地を考える前にまず、この「コーポレートレポート」は何のために存在するかを考える必要がある。鉄建建設のコーポレートレポートの編集方針でも述べられている通り、

コーポレートレポートは企業の事業活動全体を理解してもらうためにある。コーポレートレポートは株主や社員、取引先の企業から、将来その企業に入社するであろう人々までもが読むものであるだろう。そのため、私はこのコーポレートレポートの改善点を様々な人が読むものであることを前提として考える。

第一に読みやすさである。コーポレートレポートは多くの人に読まれ、その企業の価値を理解してもらって初めて意味のあるものとなるのだから、まずは誰もが読みやすいものである必要がある。すべての人がコーポレートレポートをパソコンやタッチパッドで読むわけではない。スマートフォンで読む人も多くいるはずである。そうした場合に問題になるのが1ページのサイズである。このコーポレートレポートはおそらくパソコン上で作られたであろうから仕方ないが、鉄建建設のコーポレートレポートは見開き1ページが一つのページとして作成されている。そのため、スマートフォンで読む際にはわざわざ拡大して読む必要が出てくる。実はこれは結構面倒くさい。多くの人に読んでもらうためには、誰もが手軽に読める必要がある。そのため、パソコン版とスマートフォン版で1ページの分量を変え、スマートフォン版では、見開きの半分が1ページとなるように設定するだけで、読みやすさは大きく変わるのではないだろうか。

第二に内容の構成である。一つ目の問いへの回答でも述べたように、鉄建建設の目指す姿は十分に理解できるのだが、それを達成するために行われている取り組みがあまり多く語られていない。5つの取組方針のそれぞれについて具体的な取り組みを明示すれば、より多くの人に鉄建建設の企業価値向上の努力を理解してもらえるはずだ。

最後に挙げるのは同業他社との比較である。業界平均との比較などによって、鉄建建設はどのような点で他の企業より優れているかを理解してもらえるはずだ。こうすることで、ステークホルダー等の人々は、鉄建建設の価値を絶対的な視点からだけでなく、相対的な視点からの観察も可能となり、より正確に企業の価値を伝えられるようになると私は考える。